

演題：「夜回り先生、いのちの授業 ～子どもたちの明日を求めて～」

(平成 27 年 10 月 13 日 水谷 修 講師)

あっという間の 90 分間だった。水谷講師の講演を拝聴するのはおよそ 2 年振りで 2 度目のことであったが、以前に感じた力強さは健在で、語り始めてものの数分で聴衆を引き込んでしまった。

ご自身の生い立ちから、“世の中を変える子どもたちを育てたい”という思いで教員になったこと、エリート校から養護学校、そして定時制高校に勤め、「夜回り」をするようになった切掛けなどのエピソードを巧みに語ってくださった。

「私は、戦後最も子どもを殺した教員です」という言葉が印象的だった。

講演や著作に触れた者の殆どは、歪んだ道へ飛び込んでしまった子どもたちをこれだけ見つけ、救い、今も最前線で戦っている偉人という印象をもっているかと思う。かくいう私も同様の印象をもっていたので、その言葉を聴いた時、思わず水谷講師の顔を見つめた。

「本来、人の人生に足を踏み入れてはいけない。自分は足を踏み入れ過ぎた。」

水谷講師は、これまでおよそ 26 万人もの子どもたちと関わり、そのうち 11 名が殺人罪を犯し、118 名が自死、51 名が薬物により死亡したという。

講演の後半、「夜回り」を通して巡り合った子どもたちとの出会いと別れ（死）がいくつか語られたが、どのケースも、子どもたちの境遇や推し量ることなど出来ない心中を思うと、とても悲しくやるせない気持ちになるばかりの話であった。

しかし、やはり水谷講師の手によって救われたことには間違いはなく、それがたとえ悲しい結果になったとしても、自分のために心を砕いてくれた大人のことを忘れることはないのではないだろうか。

「せめて亡くなった子どもたちのことを書き、語り継いでいくことが務め。」

「亡くなった人を語ることで、この世を一所懸命生き抜いたという事実が残る。話すことで生き返らせることが出来る。」

水谷講師はご自身の言葉通り、講演活動のため日本各地を飛び回っている。

生きていくうえでの悲しみからは逃れられない、だからこそ悲しみを自分の内側に溜めてはいけない。笑顔を忘れず、周囲の人（家族）に優しく接して欲しい。

多くの悲しみや苦しみ、喜びに深く触れてきた水谷講師だからこそその裏打ちされた言葉が、1 人でも多くの人に届けばいいと感じた。